



存在と記憶の距離感  
第六話

オーバーリン

さっきから身体が前後に揺れている。身体に重圧がかかって呼吸がし辛い。スプリングがギシギシと軋み、私はベッドに沈み込んで宙を仰ぎ見ている。でも、視界は遮られ、部屋の天井は見えない。見えるのは男の顎の下、汗が滴り落ちて、眼の中に入った。沁みて、蘭は眼をつぶった。真っ暗な中、覆い被さって蘭を揺らす男の重みと、私の中に出たり入ったりしている性器の間隔、それだけが感じられる。

悪くない、と蘭は思った。私はこれが好きなんだ、ずっと前から、ずっと。男の性器が私の中に入ってきて、出ていく。そしてまた入ってきて、出ていく。飽きる事もなく繰り返されるこの上下運動が、私は好きなんだ。

男の振動が段々と速くなっていく。こいつ、そろそろイクな。まだ入れてから五分と経ってないじゃないか、使えない。また次のを捜さなくちゃいけない。今日はもう遅いから、捕まえられないかもしれない。明日に備えて今日はもう終わりにしておこうか。

ぼんやりとそんな事を考えているうちに、男は果てて、動かなくなった。その後暫く、男は蘭の上で動かず呆けていたが、おもむろにベッドの脇にある時計を見やり、あわてて起き上がった。

「やべ、終電無くなっちゃう。」

そう言うと、そそくさと着替え、背広のポケットから財布を取り出した。古びてよれた皮の財布の中には、お札はほんの数枚しか入っておらず、男はその中から一万円札を一枚と五千円札を一枚、取り出して蘭に差し出した。

「はい、お金ここに置いとくね。じゃ、俺先に帰るから。」

そう言って男はそそくさと部屋を出ていった。

ホテルから出ると、終電が終わったにも関わらず道には客を捕まえ損ねた女達は何人か立っていた。それらの女達は韓国人や中国人の歳の入った女達だった。彼女達は一人ホテルから出てきた蘭を恨めしげに睨んだ。蘭はそんな女達を別段気にするでもなく、ホテル街を後にした。それは、蘭にとって女は興味の対象外であったからであるし、もし仮にそうではなかったとしても、結果は変わらず、気にすべき相手ではなかった。蘭がいつも立っているこのホテル通りは、ほとんど最低の値段で男に身体を売る娼婦たちが立っている通りであったし、そこですらろくに客も捕まえられない様な女達に嫉妬交じりの眼で睨まれようと、これっぽちの優越感の足しにもなりはしないのだった。

今年で22歳になる蘭の様な若い女が、この通りを定位置にして身体を売っているという事はほとんど考えられない事だった。しかも、蘭は特に見てくれに問題がある訳でもない、自分ではそう思っていたし、事実誰が見てもそうであった。蘭程度の若い女であれば、この通りからほど近い歌舞伎町の店でも十分に稼げるはずである。そんな女がこの通りに立っていたら嫌でも目立つ、先程の女たちが蘭の事を睨みつけたのも無理のない話である。

では一体なぜ、蘭はこの通りに立っているのか。答えは単純である。ここに立っているのが男を見つけるのに一番楽な方法だったからだ。蘭は金に困って身体を売っているのではなかった。ただ単に男とやりたいだけなのである。だから、別に身体を売る必要さえもないのではあるが、そうした方が簡単に男と寝る事が出来るというだけの話なのだ。蘭が身体を売る様になったのは高校を卒業してからの事で、それまでは街でナンパ待ちをしたり、声を友達に男を紹介してもらったりしていた。ただ、そうした場合には出会った男と寝るまでに最低でも数時間はかかる訳で、蘭にはそうした何やかやのステップは煩わしいだけだった。出会い系やテレクラを使っていた事もあったが、それよりも今しているように娼婦たちと一緒に立っていた方が楽であり時間もかからない事に気付き、それ以来毎日、日が暮れるとこの通りに立つことにしているのである。また、店で働いていた事もあったが、そういった店では決まりやら同僚との人間関係が煩わしく、すぐに辞めてしまった。

一つ年上の従妹の真希ちゃんは蘭が身体を売っている事を良く思っていない。思うだけじゃなくて会うたびに一々口うるさく文句を付けてくる。「危ないからやめた方がいい」とか、「女がそこまで落ちたらお終いだ」とか。蘭は「ふん、自分だってキャバやってて、よく客と寝てる癖に」と思いながらも、真希のだらだらと長ったらしいその文句を黙って聞くことにしている。いつも下を向いて、空になった飲み物のグラスに残っている氷をかき混ぜたりしながら、聞き流している。そうしていると真希ちゃんは蘭が落ち込んだ、もしくは反省した、と思いこんで満足し、話が早く終わるのである。

この日もそうだった。立ちんぼを終えて帰る途中に真希ちゃんから、電話があった。今日は真希ちゃんは働いている横浜のキャバを休んで新宿に来ているから会おうという内容だった。すぐに落ち合って、真希ちゃんが休みの日だからお酒を飲みたくないと言うので深夜営業のファミレスでドリンクバーを注文して、そこから今まで延々とお説教されていたのだ。

「もう、蘭もしっかりしなさいよ。」

真希ちゃんはそう言ってジュースをおかわりしに席を立った。この「しっかりしなさいよ」が真希ちゃんの説教の終わりの合図なので、蘭はほっとした。

真希ちゃんとは昔からいつも一緒にいて、蘭にとっては色々世話焼いてくれるお姉ちゃんのような存在だった。真希ちゃんの両親は真希ちゃんが中学生の時に離婚して、それから真希ちゃんはお母さんと一緒に暮らしていたんだけど、真希ちゃんはお母さんと仲が悪くて、しょっちゅう家出しては蘭の家に転がり込んだりしていた。その後、真希ちゃんは高校を一年足らずで中退して、それからはずっとお水の仕事をしながら一人で暮らしている。

蘭の両親は離婚こそしなかったけど、決して夫婦仲が良かった訳でもなくて、二人とも自分の部屋に閉じこもって、家の中では殆ど会話もなかった。両親揃って蘭の事にも無関心だった。だから、真希ちゃんが一人暮らしを始めてからは殆ど家には帰らずに真希ちゃんの家に入り浸っていたな。だから、蘭が高校を出てから（就職が決まった訳でもないのに）一人暮らしをすと言っても両親は何も言わなかったし、蘭が今売りをして生計を立てている事も知らない。

二人ともこんなだったから、ずっと一緒にいたんだと思う。真希ちゃんの説教にはほとほとうんざりしていたし、売りを辞める気なんてさらさら無かったけれど、それでも蘭は真希ちゃんの事が好きだった。小さい頃からずっと一緒だったし、私の事

を本当に心配してくれるのは真希ちゃんしかしない。蘭はそう思っていたし、真希ちゃんの事を信賴していた。

真希ちゃんがアイスティーが一杯に入ったグラスを持って席に帰ってきた。真希ちゃんは席に着くなり今働いているキャバの同僚や、客の悪口を猛烈な勢いで愚痴りはじめた。蘭はそれにうんうんと頷きながら「真希ちゃんが今持ってきたアイスティーを飲み終わったら帰らなくちゃ。」とぼんやりと考えていた。

今日は帰ったらすぐに寝よう。明日に備えなくっちゃ。だって、明日は撮影があるんだもん、しっかり寝て体力を蓄えとかななくっちゃ。明日は楽しみにしていたAVの撮影日なのだ。

蘭がAVの仕事を始めたのは一年ほど前の事だった。それから月に2、3本のペースで撮影をしている。蘭はいわゆる企画もの系のAVに出演する女優だったから、一本の撮影では10万程度の金が入るだけで、それはメジャーレベルに所属するアイドル女優と較べて割のいい仕事とは言えなかったが、蘭は企画系のAVの仕事の方が好きだった。せっかくセックスのプロとやれるのに、普通のセックスと同じようなことしかしないなんてもったいない、蘭はそう思っていたのだ。

企画系のAVは女優にとってはハードな内容のものが多かったが、自分の欲求の充足という蘭の純粋な目的にとってはそれは好都合であった。マンコ、アナル、口の三つの穴に同時に男性器を挿入されたり、棍棒の様な性器を持つ黒人に犯されたり、何十人もの男達に輪姦されたり、緊縛されて電気ドリルの先にバイブをとりつけた玩具でイカされまくったり、例を挙げればきりが無いが、そんな非日常の極致ともいべき撮影の数々は蘭にとっては快樂そのものであり、毎回毎回の撮影が楽しくて仕方がなかった。

普通の企画系の女優達は（蘭とは違い）不本意ながらそこに堕ちてきた者も少なくなく、撮影の度に泣きながら帰る女などもいるのだが、蘭の場合は撮影が終わると毒が落ちたようなスッキリとした表情で、でも少し名残惜しいというか物足りないという様な様子でいるものだから、監督はじめ現場のスタッフからも「蘭ちゃんは元気でやりやすい」という事で好かれていた。企画系の女優は一本出たらお終いという子もいるくらい、普通のAVと較べても特に女優の寿命が短い。1年以上続けている蘭などは珍しい部類に属するのだが、その真面目な勤務態度からか仕事が途絶える事もなく、蘭の方でも続けられる限り続ける気でいた。

ズズズッという音を立てて、真希ちゃんがアイスティーを飲みほしたので、蘭は声をかけた。

「あたし明日早いから、今日はそろそろ帰る。」

「え、何かあるの？」

「うん、ちょっと。」

蘭がそう濁したのをみて、真希ちゃんが眉をしかめる。

「もしかして、あんたまだAVの仕事やってんの？やめときなって言ったじゃん。顔ばれとかしたら後々面倒だし、きっと後悔するって。」

このままでは、またいつもの調子で真希ちゃんの詰りが始まってしまう。

「でも・・・、素人ものだから顔には目線入ってるし・・・、大丈夫だよ。」

蘭がモジモジしてそう答えると、

「いや、そういう問題じゃなくってさあ。あんたには恥じらいとかプライドとか、そういうものはない訳？」

うんぬんうんぬん。真希ちゃんはぶつぶつ言っている。

「うん、じゃあ、またね。」

蘭は無理やりに真希ちゃんの説教を遮って、席をたった。

「あ、蘭、ちょっと待ちなさいよ！話まだ終わってないんだからあ！」

真希ちゃんはそう言って、まだぶつぶつ言いながらも蘭を追って席をたった。

真希ちゃんの言う様に、わたしには恥もプライドもない、と蘭は思う。蘭にとってそんなものは余計でしかなく、何の必要もない。快樂、それがすべてだ。男に求められる事、蘭にはそれがすべてだ。お金すら要らない。快樂の結実、それが蘭の人生なのだ。ただそれゆえに、自分にとっての人生が、先がそう長くはない事も蘭は知っていた。男から必要とされなくなる時、蘭の人生は終わるのだ。蘭はその事をはっきりと認識していた。けれども、他の女たちがよくそうするようにそれが理由で焦ったり、その焦りゆえに心を醜くしてしまうということにはなかった。蘭はいずれ終わるという自分の運命をそのままに受け入れていたのだ。だから、真希ちゃんが会うたびに愚痴ばかり言って、恥とかプライドとかなんとももったいつけているのは、少しでも自分を高く男達に売りつけようとして焦り、ヒステリーになっているようにしか見えなかった。そして蘭はそんな真希ちゃんが可哀想に思えた。

蘭は死を恐れる事はなかったのだ。一方で、男達は皆一様に死を恐れていた。脅えきっていて、死から逃れようとし、駆り立てられるようにして女を求めていた。快樂に溺れようとしていた。その点においては、蘭と男達は決定的に違っていた。そして蘭はその違いが好きだった。男達の焦げ付く様な怖れを憐れみ、慈しんだ。男を受け入れ、男を求めた。男というものを心底から愛していた。

母に甘えるように、すがるように蘭を求める男、責め立て、征服しようとして蘭を求める男。男達の行為はそのどちらかの形式をとることが多かったが、それは表面上の表れ方の違いでしかなく、求めるものは同じだった。男達は生命の泉で渴きを潤したいと、そう思っていたのだ。蘭は死を恐れないがゆえに、男達に惜しみなくそれを与えた。男達にとって、蘭は寛容さそのものだったのだ。



## 存在と記憶の距離感 第六話

<http://p.booklog.jp/book/24560>

著者：オパーリン

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/opaarinn/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/24560>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/24560>